

第I部 研究の概要

1 研究の目的

課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体的行動力、構想力、そしてコミュニケーション能力の育成に向けて、国語科、地理歴史科、公民科、数学科、理科、外国語（英語）科の学習活動について、学習到達目標を明確にしたパフォーマンス課題及びルーブリックを作成し、評価を行う。この評価手法の妥当性・信頼性を高め、生徒の資質・能力の向上を図るために実践的な調査研究を行う。

1年目は理科及び外国語（英語）科を、2年目は共通教科の6教科を研究対象とした。3年目の本年度も6教科での取組を継続し、それぞれの教科の特性を生かした評価手法に関する研究を実施することで、高等学校における教育の質の向上を目指す。

2 研究の実施状況

(1) 研究の組織（資料1）

県教育委員会高等学校教育課、総合教育センター、研究校5校が、名古屋大学、明治大学、筑波大学、愛知教育大学及び早稲田大学の先生方から指導・助言を受け、連携して実践研究を行う。

高等学校教育課の下に「評価手法検討会議」を、総合教育センターの下に「高等学校における多様な評価手法に関する研究会」を、各研究校内において「校内研究委員会」を設置し、年間計画及び具体的な評価場面や方法について検討の上、実践している。また、研究授業・研究発表会を開催し、研究の経過報告と成果の普及を図っている。

(2) 検討会議等の開催

ア 評価手法検討会議の開催 （年間3回）

名古屋大学大学院 柴田好章教授を座長として、大学の顧問、高等学校教育課、総合教育センター、研究校の委員が参加した。

第1回会議（平成27年7月14日）では、本年度事業のねらい及び全体計画の共通理解を図り、各研究校の計画について協議した。

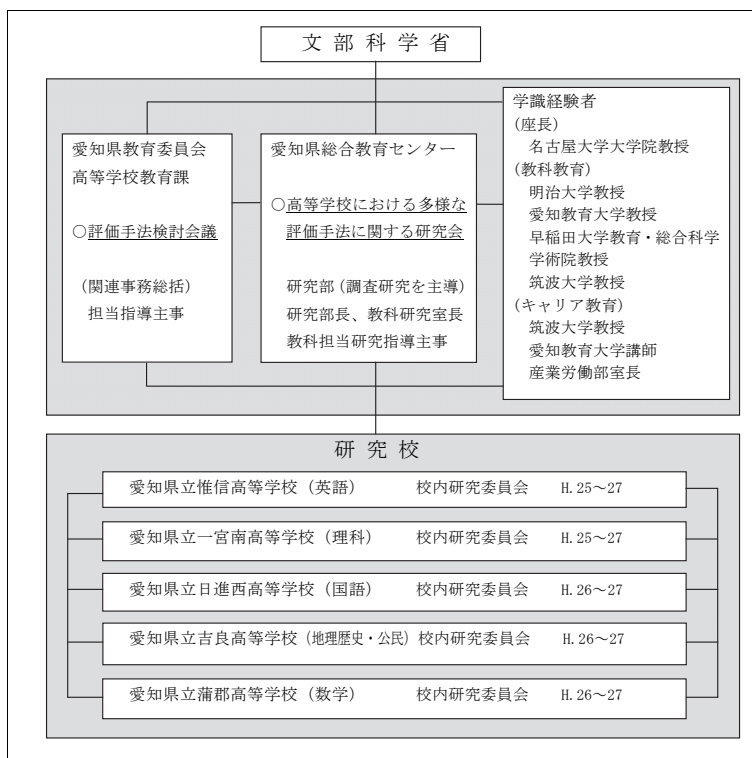
第2回会議（平成27年11月27日）は、総合教育センター研究発表会における部会発表の場と兼ね、研究成果を公開で報告した。センター研究発表会全体として442名の参加があり、本研究の部会には129名が参加した。

第3回会議（平成28年2月2日）では、各研究校における実践の成果と課題を共有し、今後の普及と還元の在り方について協議した。

イ 高等学校における多様な評価手法に関する研究会の実施（年間5回）

総合教育センター所員と研究校の委員が、大学の顧問から指導・助言を受けて、各教科の具体的な単元におけるパフォーマンス課題及びルーブリックの作成とパフォーマンス評価の実践について協議した。教科の特性を踏まえたパフォーマンス評価の在り方を異なる教科からの視点を含めて検討するとともに、研究校間の連携を深めることができた。

【資料1 研究組織図】



(3) 各研究校における指導と評価の計画

ア 研究校における目指す生徒像の設定

課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体的行動力、構想力、そしてコミュニケーション能力の育成を主眼として、生徒の学びの現状を捉えた上で目指す生徒像をそれぞれ設定し、学習到達目標を「生徒が身に付ける力」として具体的に掲げる。キャリア教育の視点も採り入れる。

イ 主体的・協働的な学習活動（アクティブ・ラーニング）の導入

目指す生徒像の実現に向けて、教科の特性を踏まえた学習活動及び評価方法を検討する。特に、主体的・協働的な学習活動を中心とした単元構想を立てる。

ウ パフォーマンス評価等の導入

単元構想の段階で、主体的・協働的な学習活動の成果として「生徒が身に付けた力」を把握するために、パフォーマンス評価を計画する。

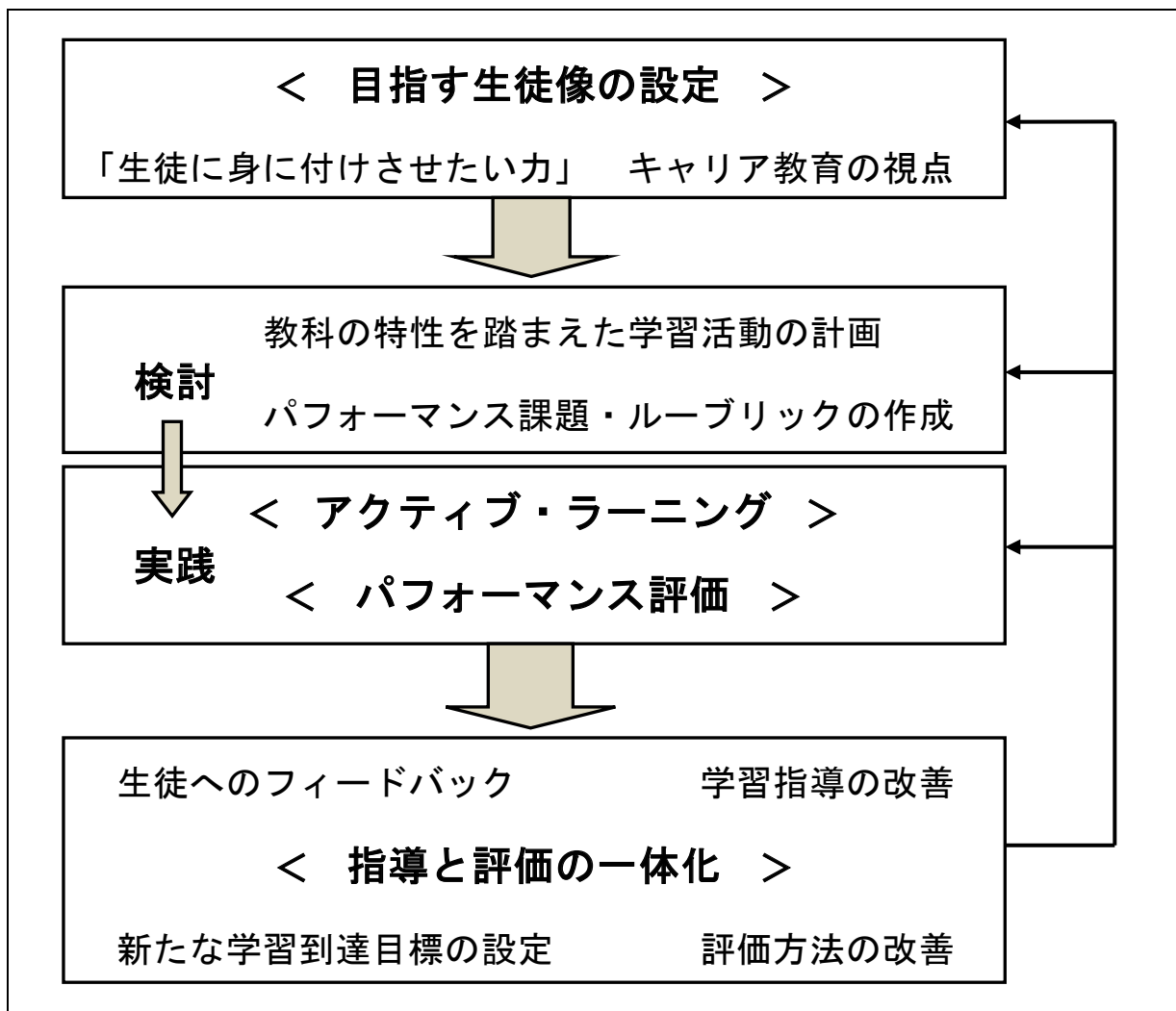
パフォーマンス評価はパフォーマンス課題とルーブリック（評価基準表）から成る。生徒は「パフォーマンス課題」に取り組み、その成果により可視化された生徒の学力を、「ルーブリック」によって解釈するものである（資料3、資料4）。また、学習成果の計画的な記録に基づくポートフォリオ評価も試みる。

エ 「指導と評価の一体化」のチームとしての推進

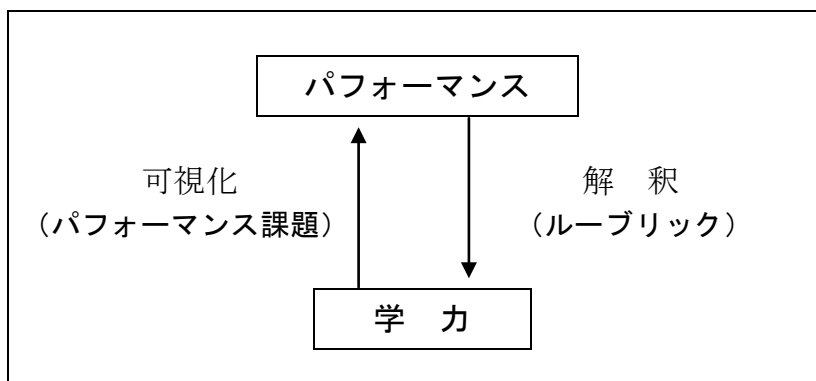
評価結果を生徒へフィードバックして、その後の学習に役立たせたり、教師の学習指導の改善につなげたりできるように、教科担当者が協力して研究を推進する。

各研究校の研究の流れは、次のとおりである（資料2）。

【資料2 各研究校の研究の流れ】



【資料3 パフォーマンス評価の構図】



松下佳代(2007)『パフォーマンス評価』日本標準 p. 11 から抜粋

【資料4 用語解説】

○ パフォーマンス評価

知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求めるような評価方法。
論説文やレポート，展示物といった完成作品（プロダクト）や，スピーチやプレゼンテーション，協同での問題解決，実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。

○ ルーブリック

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と，それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準表。

○ ポートフォリオ評価

児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。
そのファイル等を活用して児童生徒の学習状況を把握するとともに，児童生徒や保護者等に対し，その成長の過程や到達点，今後の課題等を示す。

教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料（平成27年8月）p. 40 から抜粋

(4) 研究校一覧

研究校の担当教科・指導助言者等は下表のとおりである。

研究校	研究期間	教科	指導助言者
愛知県立惟信高等学校	平成 25～27 年度	外国語（英語）	明治大学 尾関直子 教授
愛知県立一宮南高等学校	平成 25～27 年度	理科	愛知教育大学 平野俊英 教授
愛知県立日進西高等学校	平成 26～27 年度	国語	早稲田大学教育・総合科学学術院 町田守弘 教授
愛知県立吉良高等学校	平成 26～27 年度	地理歴史，公民	愛知教育大学 土屋武志 教授
愛知県立蒲郡高等学校	平成 26～27 年度	数学	筑波大学 清水美憲 教授
※「評価手法検討会議」座長			名古屋大学大学院 柴田好章 教授
※キャリア教育に関する指導・助言			愛知教育大学 高綱睦美 講師

(5) 研究校における実践

以下に実践の概要をまとめ、「第Ⅲ部 実践編」にて各研究校の取組の詳細を記す。

ア 愛知県立惟信高等学校の実践（外国語〈英語〉，3年目）

生徒のコミュニケーション能力の伸長を目指し、全学年でスピーキングテスト及びライティングテストを実施し、「外国語表現の能力」を中心に評価するとともに、指導の改善を図った。また、プロセス・ライティング（その場限りの評価ではなく、「生徒による作品の提出」→「教員による添削・コメント」→「生徒による書き直し」というやりとりを何度も繰り返して最終的な作品を完成させていく手法）を充実させるとともに、日本人教員とALTとが共同でルーブリックの妥当性・信頼性を追究する研究を進めた。さらに、3年間にわたる実践における教員と生徒の変容を調査・考察した。公開研究授業・成果発表会（平成28年1月28日）には、37名が参加した。

本年度の主な実践場面は次のとおりである。

(ア) スピーキングテスト

「外国語表現の能力」のうち「話すこと」の評価を行うために、各学年でスピーキングテストを実施し、ルーブリックを用いて評価を行った。実施回数は、1年生3回、2年生2回、3年生1回とした。スピーキングテストはそれぞれ20点満点の試験として扱い、評価結果を成績に反映させた。また、評価結果の再検討を想定し、テスト中のやりとりはICレコーダーで記録し、保存した。

(イ) ライティングテスト

「外国語表現の能力」のうち「書くこと」の評価を行うために、各学年でライティングテストを実施し、ルーブリックを用いて評価を行った。実施回数は、1年生3回、2年生1回（3段階に分けて実施）、3年生1回とした。ライティングテストはそれぞれ20点満点の試験として扱い、評価結果を成績に反映させた。

イ 愛知県立一宮南高等学校の実践（理科，3年目）

知識や技能を習得する力、それらを活用する力、さらに課題を探究する力を身に付けさせることを目指した。物理、化学、生物において、観察・実験や探究的な活動での「思考・判断・表現」と「観察・実験の技能」について、レポートや自己評価のデータを「関心・意欲・態度」及び「知識・理解」との関わりを踏まえて段階分けしたルーブリックによって評価する手法を研究した。生徒の実態を踏まえ、単元の特性を生かしたパフォーマンス課題を開発するとともに、全てのパフォーマンス課題に通じる平素の授業の留意事項の整理も進めた。公開研究授業・成果発表会（平成27年10月27日）には59名が参加した。

本年度の実践場面は次のとおりである。

(ア) 物理実験：第2学年「水平投射から重力加速度を求める」

(イ) 化学実験（小課題）：第2学年「電池の仕組みについて考察する」

(ウ) 物理実験：第2学年「未知の回折格子の格子定数を導き出そう」

(エ) 化学実験：第2学年「捕集する水素の体積を決め、必要な試料等の条件を考え検証する」

(オ) 生物実験：第2学年「酵素のはたらき（デヒドロゲナーゼ）」

(カ) 物理実験：第2学年「2秒振り子の作成」

(キ) 化学実験：第2学年「万能指示薬を用いた滴定曲線の作成」

(ク) 生物実験：第2学年「原形質分離の観察による等張液の濃度の測定」

ウ 愛知県立日進西高等学校の実践（国語，2年目）

言葉を通して的確に理解し、論理的に考え豊かに想像し、話したり書いたりして伝え合う生徒の育成を目指した。現代文の分野では、情報を整理・分析して意見を述べたり、論旨を要約して他者に伝えたりする言語活動を行い、小論文、スピーチ及び要約文をパフォーマンス課題として、思考力・表現力等についてルーブリックにより評価した。古典の分野では、文章の表現や人物の心情について鑑賞・批評する言語活動を行い、脚本へのリライトや鑑賞文をパフォーマンス課題として、読解力・想像力等について評価した。公開研究授業・成果発表会（平成27年12月7日）には79名が参加した。

本年度の主な実践場面は次のとおりである。

- (ア) 授業実践：第1学年「国語総合」「小説の読み方を知ろう」（芥川龍之介『羅生門』『仙人』）
- (イ) 授業実践：第3学年「現代文B」「読み比べて小論文を書こう」（新聞5紙）
- (ウ) 授業実践：第3学年「現代文B」「ピア・リーディングで要旨をつかもう」（内山節『自由論』）
- (エ) 授業実践：第3学年「現代文B」「プレゼンテーションをしよう」（自作教材）
- (オ) 授業実践：第3学年「古典B」「『車争ひ』をワイドショーで検証しよう」（『源氏物語』）

エ 愛知県立吉良高等学校の実践（地理歴史及び公民，2年目）

多様な意見を踏まえた上で論理的に自分の考えを構築できる生徒の育成を目指した。第1学年の「日本史A」において、「幕末から明治にかけての日本の近代化遺産」をテーマとしてグループ学習を採用し、パフォーマンス課題を通じた歴史解釈に取り組みせ、「関心・意欲・態度」及び「思考・判断・表現」についてルーブリックによる評価を行った。また、第2学年の「倫理」では男女共同参画社会についての課題に取り組みせたり、第3学年の「政治・経済」では地域への社会参画についてディベートを設定したりして、課題解決に向けて自ら取り組む自主性や自律心の向上を図った。公開研究授業・成果発表会（平成27年11月11日）には、64名が参加した。

本年度の実践場面は次のとおりである。

- (ア) 授業実践：第1学年「日本史A」「近代化遺産から見る社会の変化」
- (イ) 授業実践：第1学年「日本史A」「近代化の進展と社会問題」
- (ウ) 授業実践：第2学年「倫理」「現代の家族とその課題」
- (エ) 授業実践：第3学年「政治・経済」「課題探究学習～ディベートを用いた主権者教育～」

オ 愛知県立蒲郡高等学校の実践（数学，2年目）

基本的な概念や原理・法則への深い理解をもち、事象を数学的に考察し、他者に論理的に表現できる生徒の育成を目指し、最終的な学習到達目標を明確に設定した上で、単元構想の中にパフォーマンス課題を位置付けた。「数学I」において、2次関数を活用する課題を設定し、ジグソー法を用いたグループ学習を行ったり、「数学A」において、確率を活用して条件に合うさいころをつくる課題を設定し、グループ学習で他者の考えを考察させたりして、数学の有用性を実感させた。また、課題学習の成果をできるだけ容易に評価できるルーブリックを作成した。公開研究授業・成果発表会（平成27年10月30日）には、71名が参加した。

本年度の実践場面は次のとおりである。

- (ア) 授業実践：第1学年「数学I」「数と式」数学的な考察と表現力による課題
- (イ) 授業実践：第1学年「数学A」「場合の数」身近にある教材の利用
- (ウ) 授業実践：第1学年「数学I」「2次関数」ジグソー法の実社会における活用
- (エ) 授業実践：第1学年「数学A」「確率」他者の考えに対する数学的な考察

3 本年度の研究の成果と課題

研究校の実践から得られた成果と課題の概要を以下に記す。

(1) 愛知県立惟信高等学校（英語）の実践から

ア 生徒への効果

- ・パフォーマンステストを導入し、授業における言語活動を充実させたことにより、以前に比べて英語の授業に前向きに集中して取り組むようになった。さらに、英語を話したり書いたりする活動に対する抵抗がなくなってきた。

イ 教員の意識の変化

- ・CAN-DOリストを作成する過程で、「本校ではこんな生徒を育てたい」という目標が徐々に明確となり、「目指す生徒像」を教員間で共有することができた。
- ・英語科全体として研究に取り組んできたため、指導方法や評価方法等に関する打ち合わせ、成果と課題についての意見交換等、教員同士でコミュニケーションをとる機会が増え、英語

科全体のチームワークが向上した。

ウ 評価の信頼性の確保

- ・ルーブリックによる評価の信頼性を確保するために、次のように手順を整理した。
 - ①事前に評価者全員で、テストのねらい、評価基準の捉え方等について十分に話し合いを行い、評価のイメージを共有する。
 - ②各評価者がそれぞれの評価を行う前に、サンプルとして幾つかのパフォーマンスを全員で評価し、評価結果について協議する。
 - ③評価に迷うパフォーマンスをリストアップし、それについての評価結果を共有する。
 - ④後で評価結果を修正できるよう、パフォーマンスの様子をICレコーダー、ビデオカメラ等で記録しておく。

エ 今後の課題

- ・長期的に取組を継続するための組織づくりや教員の負担の軽減が課題である。

(2) 愛知県立一宮南高等学校（理科）の実践から

ア 「分からせる」授業から「できるようにさせる」授業への転換

- ・教科、科目で求められている内容を生徒に「分からせる」授業を行いながら、さらにパフォーマンス課題等を導入した指導に取り組むことにより、生徒一人一人を「できるようにさせる」授業への転換という視点の重要性を認識できた。

イ 計画的な評価による授業の設計

- ・理解した学習内容が課題の解決に結びついたことを実感できるような「生徒がおもしろいと思うパフォーマンス課題」を考えることを出発点として、「何ができたら理解できているとするのか」「できていなければどのように支援するのか」を、形成的な評価を通して確認し、授業を再設計する必要性を実感できた。

ウ 生徒の自己評価を踏まえた授業改善

- ・生徒の自己評価は、教師の授業の在り方を見つめ直し、生徒の資質・能力の向上を目指す授業改善に、積極的かつ具体的な視点をもって生かすことができることを確認できた。

エ 今後の課題

- ・多様な評価手法の開発と妥当性に関する検討、キャリア教育を含めた組織的な教育活動への転換、そして、教員の負担にならない指導と評価の在り方を探ることが課題である。

(3) 愛知県立日進西高等学校（国語）の実践から

ア 適切なパフォーマンス課題とルーブリックの作成

- ・単元のまとめとして行うパフォーマンス課題は、その単元で育成したい力（単元の目標）の達成状況を見取することを目的としており、適切なパフォーマンス課題とルーブリックを作成するためには、単元の目標の具体化・焦点化が大切だということが分かった。

イ 思考力・判断力・表現力・主体性・協働性等を育てるグループワーク

- ・グループワークについては、生徒の活動時間が増えること、主体的・協働的な学習が実現しやすいこと、学習意欲が高まることなどが利点として確認できた。一方で、生徒の学びの実態を指導者が把握しきれず、学習効果を十分に上げることができない場合もあることが分かった。

ウ 振り返り活動の効用

- ・毎時間における振り返りの活動は、次の三点で学習効果が大変高いことが分かった。
 - ①学習内容への関心・意欲の向上
 - ②指導改善と学び方の改善
 - ③生徒の表現力、自己省察力の向上

エ 今後の課題

- ・十分な教材研究に基づき、単元の目標と学習活動及びパフォーマンス課題との整合性を更に

高めることが、今後の課題である。

(4) 愛知県立吉良高等学校（地理歴史及び公民）の実践から

ア 生徒への効果

- ・単元に「本質的な問い」を設定してその問いの追究のために生徒が実践を積み重ねることで、より本質的なものを生徒が単元を通して追究することができ、それが生徒のものの見方・考え方の育成につながるということが分かった。

イ 教員の意識の変化

- ・授業は生徒の学びの場であり、生徒一人一人の潜在能力や意欲を引き出すために創意工夫をすることが大切であると分かった。

ウ 教員のチームとしての取組

- ・教員間で「目標とする人間像」を一緒に考え共有することで、まとまりのある効果的な指導が可能となった。また、ルーブリックの改善点を意見交換することで評価の信頼性を高めることにつながった。

エ 今後の課題

- ・身に付けた知識を活用する場面や思考力を働かせる場面を授業に採り入れることと、ふだんの授業にスムーズに採り入れられるようなパフォーマンス課題を開発することが課題である。

(5) 愛知県立蒲郡高等学校（数学）の実践から

ア 生徒の主体的な学習

- ・教師はファシリテーターに徹し、生徒の実情に見合うパフォーマンス課題の内容や授業の形態を工夫することにより、主体的な学習が達成された。

イ 教師の意識の変化

- ・「育てたい生徒像」から評価するポイントを絞り込み、その点が評価できるパフォーマンス課題を検討する「逆向き設計」の流れが重要であり、教科としての「育てたい生徒像」を検討し、それに基づいた授業計画を立てることの必要性を実感できた。

ウ 教員間の共通認識による評価の信頼性の向上

- ・ルーブリックによる評価については、「育てたい生徒像」に基づいて評価するポイントを絞り込むことに加え、評価を担当する教員が集まって評価をする機会を設けたことにより、その場で検討し修正することができた。また、評価に迷うケースでは共通認識の下で判断することができたので、教員間での評価の差は小さくなり、評価の信頼性が高まった。

エ 今後の課題

- ・目標や計画を入念に検討して単元計画書を作成することにより、学習の中でパフォーマンス課題を有効に活用していくことが課題である。

(6) 研究全般から見られる成果と課題

ア 生徒の主体的な学びの実現

- ・ルーブリックの形で学習到達目標を理解し、パフォーマンス課題に取り組むという学習の流れにおいては、生徒にとっての学習の指針が明確になり、自分もつ知識を活用して考えたり、意見を述べたりするような学習に主体的に取り組むことができた。

イ 指導と評価の一体化

- ・パフォーマンス評価等の多様な評価手法の導入の試みは、目指す生徒像の具体化と、生徒の思考力・判断力・表現力、そしてコミュニケーション能力等を高めるための指導改善に資するものであり、指導と評価の一体化を推進することになった。

ウ 教師の力量向上

- ・生徒の実態を踏まえて目標設定を行い、評価を含めた単元構想に基づいて授業実践を進めることにより、生徒の能力を伸ばすだけでなく、日常の授業での生徒の学習活動に対する教師の観察力や授業構想力も高めた。

エ 今後の課題

- ・これまで各研究校が作成し、実践してきたパフォーマンス課題及びルーブリックの蓄積は、本研究の大きな成果の一つであるが、それ以上に重要なのは、本実践研究のプロセスを更に明らかにすることである。どの学校でも評価手法の開発と授業改善に取り組み、目の前の生徒のために独自の工夫を進められるように、成果を波及させることが今後の課題である。

4 今後の取組予定

(1) 評価手法に関する研究会の継続実施

- ・愛知県総合教育センターの所内研究として「多様な学習成果の評価手法に関する研究」を継続し、改めて3年間の研究を総括するとともに、パフォーマンス評価についてのまとめを作成する。

(2) 各種研修講座における研究成果の還元

- ・高等学校初任者研修，5年経験者研修及び10年経験者研修等における教科指導に関する研修の中で、パフォーマンス評価の体験や、課題に対応したルーブリックの作成等の演習を設定する。実際に多様な評価手法に取り組む機会を設定し、所属校での評価の改善に資するよう工夫する。

5 評価手法に関する主な参考文献

- 秋田喜代美，藤江康彦（2010）『授業研究と学習過程』財団法人放送大学教育振興会
- 佐藤浩一（2013）『学習の支援と教育評価』北大路書房
- 田中耕治（2010）『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房
- 田中耕治（2010）『新しい「評価のあり方」を拓くー「目標に準拠した評価」のこれまでとこれからー』日本標準
- 西岡加名恵（2008）『逆向き設計で確かな学力を保障する』明治図書出版
- 西岡加名恵，田中耕治（2009）『「活用する力」を育てる授業と評価』学事出版
- 松下佳代（2007）『パフォーマンス評価ー子どもの思考と表現を評価するー』日本標準
- 三藤あさみ，西岡加名恵（2010）『パフォーマンス評価にどう取り組むかー中学校社会科のカリキュラムと授業づくりー』日本標準

6 その他

(1) 委員一覧

・大学からの有識者

氏名	所属・職名	主な役割分担
藤田 晃之	筑波大学人間系・教授	評価手法検討会議の指導・助言
柴田 好章	名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教授	評価手法検討会議座長
尾関 直子	明治大学国際日本学部・教授	外国語（英語）科指導・助言
平野 俊英	愛知教育大学教育学部理科教育講座・教授	理科指導・助言
高綱 睦美	愛知教育大学教育学部学校教育講座・講師	キャリア教育指導・助言
町田 守弘	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	国語科指導・助言
土屋 武志	愛知教育大学教育学部社会科教育講座・教授	地理歴史科，公民科指導・助言
清水 美憲	筑波大学人間系・教授	数学科指導・助言

・愛知県，愛知県教育委員会事務局

氏名	所属・職名	主な役割分担
吉田 和裕	愛知県産業労働部・産業人材育成室長	評価手法検討会議助言
加藤 文彦	愛知県教育委員会高等学校教育課・課長補佐	評価手法検討会議助言
山脇 正成	愛知県教育委員会高等学校教育課・主査	事業担当者 理科の助言
栗木 晴久	愛知県教育委員会高等学校教育課・主査	国語科の助言
伊藤 君江	愛知県教育委員会高等学校教育課・指導主事	国語科の助言
堀田 庸平	愛知県教育委員会高等学校教育課・指導主事	地理歴史科，公民科の助言
前田 憲一	愛知県教育委員会高等学校教育課・指導主事	数学科の助言
井上 猛	愛知県教育委員会高等学校教育課・指導主事	外国語（英語）科の助言
福島 宏	愛知県総合教育センター・研究部長	調査研究の代表
米津 明彦	愛知県総合教育センター・教科研究室長	調査研究の総括 外国語（英語）科の調査研究
坪井 佳代	愛知県総合教育センター・企画研修室長	地理歴史科，公民科の調査研究
岩月 迅美	愛知県総合教育センター・情報システム研究室長	理科の調査研究
小崎 早苗	愛知県総合教育センター・研究指導主事	国語科の調査研究

牧野 昌子	愛知県総合教育センター・研究指導主事	国語科の調査研究
舟橋 陽一	愛知県総合教育センター・研究指導主事	地理歴史科，公民科の調査研究
近藤 哲史	愛知県総合教育センター・研究指導主事	数学科の調査研究
山本 治	愛知県総合教育センター・研究指導主事	数学科の調査研究
米津 利仁	愛知県総合教育センター・研究指導主事	理科の調査研究
河野 健治	愛知県総合教育センター・研究指導主事	外国語（英語）科の調査研究

・愛知県立惟信高等学校

氏名	所属・職名	主な役割分担
栗本 整	愛知県立惟信高等学校・校長	惟信高等学校の研究総括 外国語（英語）科の調査研究
藤吉 和之	同・教頭（英語科）	同校校内研究委員会運営
宮田 剛	同・教諭（英語科）	同校研究主務者
池田 達哉	同・教諭（英語科）	同校調査研究，公開研究授業
北川 博文	同・教諭（英語科）	同校調査研究，公開研究授業
国枝由美子	同・教諭（英語科主任）	同校調査研究
久納 知幸	同・教諭（英語科）	同校調査研究
河野 八重	同・教諭（英語科）	同校調査研究
杉本 康予	同・教諭（英語科）	同校調査研究
田岡 史吉	同・教諭（英語科）	同校調査研究
遠山 敦子	同・教諭（英語科）	同校調査研究
内藤 寛文	同・教諭（英語科）	同校調査研究
野々山淳子	同・教諭（英語科）	同校調査研究
堀口 真奈	同・教諭（英語科）	同校調査研究
山崎 浩二	同・教諭（英語科）	同校調査研究

・愛知県立一宮南高等学校

氏名	所属・職名	主な役割分担
大野 芳樹	愛知県立一宮南高等学校・校長	一宮南高等学校の研究総括 理科の調査研究
茅野 俊正	同・教頭（理科）	同校校内研究委員会運営
辻 太一郎	同・教諭（理科）	同校研究主務者
穂積 淳弘	同・教諭（理科主任）	同校調査研究

中島 美幸	同・教諭（理科）	同校調査研究，公開研究授業
早川 新司	同・教諭（理科）	同校調査研究，公開研究授業
古田 真道	同・教諭（理科）	同校調査研究，公開研究授業
朱宮 弥生	同・教諭（理科）	同校調査研究
大津 浩一	同・教諭（理科）	同校調査研究
水野 久子	同・実習教員（理科）	同校調査研究
伊藤 亜希	同・実習教員（理科）	同校調査研究

・愛知県立日進西高等学校

氏名	所属・職名	主な役割分担
北角 尚治	愛知県立日進西高等学校・校長	日進西高等学校の研究総括 国語科の調査研究
有賀 誉	同・教頭（国語科）	同校校内研究委員会運営
小林 恭子	同・教諭（国語科）	同校研究主務者，公開研究授業
松浦 由佳	同・教諭（国語科主任）	同校調査研究，公開研究授業
簾内美夏子	同・教諭（国語科）	同校調査研究，公開研究授業

・愛知県立吉良高等学校

氏名	所属・職名	主な役割分担
萩生 昭徳	愛知県立吉良高等学校・校長	吉良高等学校の研究総括 地理歴史科，公民科の調査研究
小山 信幸	同・教頭（地理歴史科，公民科）	同校校内研究委員会運営
井上 正人	同・教諭（地理歴史科，公民科）	同校研究主務者，公開研究授業
井澤 和史	同・教諭（地理歴史科，公民科）	同校調査研究，公開研究授業
長谷川太一	同・教諭（地理歴史科，公民科）	同校調査研究，公開研究授業

・愛知県立蒲郡高等学校

氏名	所属・職名	主な役割分担
木下 勝義	愛知県立蒲郡高等学校・校長	蒲郡高等学校の研究総括 数学科の調査研究
壁谷 勝義	同・教頭	同校校内研究委員会運営
大河内俊範	同・教頭	同校校内研究委員会運営
山田 佳史	同・教諭（数学科）	同校研究主務者 同校校内研究委員会運営
太田 有亮	同・教諭（数学科）	同校調査研究，公開研究授業

清水 誠司	同・教諭（数学科）	同校調査研究，公開研究授業
澤田 将卓	同・教諭（数学科）	同校調査研究，公開研究授業
渡邊 正憲	同・教諭（数学科）	同校調査研究，公開研究授業
川合 仁	同・教諭（数学科）	同校調査研究
田中 俊雄	同・再任用教諭（数学科）	同校調査研究，公開研究授業
笠原 直樹	同・期限付講師（数学科）	同校調査研究，公開研究授業
服部 肇祐	同・非常勤講師（数学科）	同校調査研究，公開研究授業
鈴木 弘章	同・非常勤講師（数学科）	同校調査研究，公開研究授業

(2) 会議等日程一覧

ア 評価手法検討会議

	期日及び会場	内 容
第1回	7月14日（火） 総合教育センター ※第2回研究協議会と同日午後開催	<ul style="list-style-type: none"> ・研究概要について（研究推進組織，実践研究のねらい・内容・計画） ・前年度の研究成果について（研究概要，ヒアリング報告） ・各研究校の研究計画・進捗状況について ・総合教育センター研究発表会における研究成果の報告について ・各研究校における研究成果の発表会，公開研究授業等の実施について ・研究成果報告書の作成について ・指導・助言 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生 愛知教育大学教育学部学校教育講座講師 高綱睦美 先生
第2回	11月27日（金） 総合教育センター	<ul style="list-style-type: none"> ・総合教育センター研究発表会における部会発表として実施（詳細は p.13 ウ 参照）
第3回	2月2日（火） 総合教育センター ※第5回研究協議会と同日午後開催	<ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度事業について ・平成27年度研究成果の報告について ・各研究校における成果と課題について ・指導・助言 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生

イ 多様な評価手法に関する研究協議会

	期日及び会場	内 容
事前打ち合わせ	4月27日（月） 県立吉良高等学校 県立蒲郡高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・総合教育センター担当所員が各研究校を訪問，事業全般の説明・打ち合わせ ・高等学校における「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」の平成27年度事業計画について
	4月28日（火） 県立一宮南高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・評価手法検討会議（親会議）と総合教育センターでの研究協議会（子会議）について
	4月30日（木） 県立日進西高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究委員会の設置と研究計画の作成について ・前年度の研究成果報告書について ・前年度のヒアリング結果について
	5月1日（金） 県立惟信高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ・質疑応答

第1回	5月27日(水) 総合教育センター	<ul style="list-style-type: none"> 研究協議会の年間計画について 前年度の研究成果について 各研究校の研究計画について 指導・助言 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生
第2回	7月14日(火) 総合教育センター ※第1回評価手法 検討会議と同日 午前開催	<ul style="list-style-type: none"> 各研究校の取組状況について(校内研究委員会, 研究授業等について) 総合教育センター研究発表会部会発表について(日程案等) 研究成果報告書について(構成等) ・教科別協議 指導・助言 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生 愛知教育大学教育学部社会科教育講座教授 土屋武志 先生 愛知教育大学教育学部学校教育講座講師 高綱睦美 先生
第3回	10月9日(金) 総合教育センター	<ul style="list-style-type: none"> 各研究校の取組状況について 総合教育センター研究発表会部会運営について(日程案, 当日配付資料等) 校内研究委員会(研究授業)及び研究校の研究発表会について 研究成果報告書について(様式, 構成, 作成日程等) ・教科別協議 指導・助言 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生 明治大学国際日本学部教授 尾関直子 先生 愛知教育大学教育学部社会科教育講座教授 土屋武志 先生 筑波大学人間系教授 清水美憲 先生 愛知教育大学教育学部学校教育講座講師 高綱睦美 先生
第4回	11月6日(金) 総合教育センター	<ul style="list-style-type: none"> 各研究校の進捗状況について(資料交換) 総合教育センター研究発表会について(部会運営案, 要項案等) 総合教育センター研究発表会の合同部会リハーサル 校内研究委員会(研究授業)及び研究校の研究発表会について 研究成果報告書について ・教科別協議 指導・助言 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生 愛知教育大学教育学部学校教育講座講師 高綱睦美 先生
第5回	2月2日(火) 総合教育センター ※第3回評価手法 検討会議と同日 午前開催	<ul style="list-style-type: none"> 研究成果報告書について 教科別協議(本年度の反省と次年度の計画について) 指導・助言 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生 愛知教育大学教育学部学校教育講座講師 高綱睦美 先生

ウ 総合教育センター研究発表会

期日及び会場	内 容
11月27日(金) 総合教育センター	<ul style="list-style-type: none"> 大会テーマ「学校の力, 教師の力を高める」 講演「世界の中でみた日本の授業の特質は何か - 学習指導の持続的な改善を求めて - 」 筑波大学人間系教授 清水美憲 先生 第1部会「高等学校における多様な評価手法に関する研究(国語, 地理歴史, 公民, 数学, 理科, 英語)」 総合教育センターから基調提案・各研究校からの研究成果報告 パネルディスカッション形式の研究協議 指導・助言: 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章 先生 明治大学国際日本学部教授 尾関直子 先生 愛知教育大学教育学部社会科教育講座教授 土屋武志 先生 筑波大学人間系教授 清水美憲 先生 愛知教育大学教育学部学校教育講座講師 高綱睦美 先生

エ 研究校における研究授業及び研究発表会

会場	期日	内容
県立惟信 高等学校 [英語]	1月28日(木) 【研究発表会】	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「英語表現Ⅰ」「英語表現Ⅱ」 指導・助言：明治大学国際日本学部教授 尾関直子 先生 名古屋大学大学院教授 柴田好章 先生 愛知教育大学講師 高綱睦美 先生
県立一宮南 高等学校 [理科]	5月28日(木)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「物理」：水平投射から重力加速度を求める 「化学」：電池の仕組みについて考察する 指導・助言：愛知教育大学教授 平野俊英 先生
	7月9日(木)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「物理」：未知の回折格子の格子定数を導き出そう 「化学基礎」：捕集する水素の体積を決め、必要な試料等の条件を考え検証する 「生物」：酵素のはたらき(デヒドロゲナーゼ) 指導・助言：愛知教育大学教授 平野俊英 先生
	10月27日(火) 【研究発表会】	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「物理」：2秒振り子の作成 「化学基礎」：万能指示薬を用いた滴定曲線の作成 「生物」：原形質分離の観察による等張液の濃度の測定 指導・助言：愛知教育大学教授 平野俊英 先生 名古屋大学大学院教授 柴田好章 先生
県立日進西 高等学校 [国語]	6月11日(木)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「国語総合」：「小説の読み方を知ろう」(『羅生門』) 「古典B」：「『車争ひ』をワイドショーで検証しよう」(『源氏物語』)
	7月7日(火)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「国語総合」：「登場人物の心情を、表現に即して味わおう」(『仙人』) 「古典B」：「花山院出家事件の舞台裏を再現しよう」(『大鏡』) 指導・助言：愛知教育大学講師 高綱睦美 先生
	9月24日(木)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「現代文B」：「ピア・リーディングで要旨をつかもう」(『自由論』)
	12月7日(月) 【研究発表会】	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「国語総合」：「ピア・リーディングで小説を読む」(『幸福』) 「古典B」：「話し合いで俳句を鑑賞する」(『去来抄』『三冊子』) 「古典B」：「実演で読みを深める」(『大鏡』) 指導・助言：早稲田大学教育・総合科学学術院教授 町田守弘 先生 名古屋大学大学院教授 柴田好章 先生
県立吉良 高等学校 [地理歴史, 公民]	10月5日(月)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「日本史A」：日本の近代化…近代化遺産を題材に、当時の社会の変化について、資料を基に考察し、発表する。 指導・助言：愛知教育大学教授 土屋武志 先生 名古屋大学大学院教授 柴田好章 先生
	11月11日(水) 【研究発表会】	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「日本史A」：日本の近代化…明治時代の社会問題を題材に、その要因について、当時の時代背景と照らして考察し、発表する。 ※「倫理」, 「政治経済」も同時に実施 指導・助言：愛知教育大学教授 土屋武志 先生 愛知教育大学講師 高綱睦美 先生
県立蒲郡 高等学校 [数学]	7月上旬(複数日)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「数学Ⅰ」：数と式(集合と命題)…「ある証言から犯人は誰か考えてみよう」グループ学習
	7月上旬(複数日)	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「数学A」：場合の数…「場合の数の問題のある解答の間違いを見つけてみよう」グループ学習
	10月30日(金) 【研究発表会】	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業「数学Ⅰ」：2次関数…「交通事故の事故現場の検証をしてみよう」グループ学習 「数学A」：確率…「ちょうどよい確率になるサイコロを作ってみよう」グループ学習 指導・助言：筑波大学教授 清水美憲 先生 名古屋大学大学院教授 柴田好章 先生